

はじめに一研究発表再開へ向けて

前稿(3)で小林秀雄における「方法」と「精神」の分割という問題に筆が及んだため、続稿が難しくなってしまった。小林における「精神」の問題系は、日本の近代を論ずる際に非常に重要な問題だと思うが、われわれの目下の課題は宣長から見た契沖の評価という問題であり、小林秀雄の問題はいずれ他の場所に書くことにする。

たしかに、宣長を論ずるためには、近代における宣長の受容のし方を經由する必要があるのだが、その際も、小林の議論以前に上田萬年、芳賀矢一、佐佐木信綱、久松潜一、村岡典嗣らによって文献学の枠組みにおいて再解釈されるようになった宣長およびその「国学」という問題系がまず顧みられねばならない。帝国大学という国家機関によるお墨付きを与えられた宣長の理解というものがまず押さえられたうえで小林秀雄の『本居宣長』を読み返すならば、それがいかに近代の批判として書かれたのかが明確になるだろう。小林における「精神」の語の特権化という問題は、その遙か先に論定されねばならないのである。

ついでに言えば、時が経てば経つほど、<宣長>に関する言説は重層化していき、それにともなって、近代が画した歴史上の切断面の向こう側にある宣長のテキストそのものに向かう目は曇らされるように私は思う。小林以後、1990年代の日本の論壇では柄谷行人の領導するナショナリズム批判の枠組みが強力なイデオロギーとして機能し、宣長とハイデッガーがいっしょくたにされるといふ乱暴な議論がまかり通ってしまった(柄谷は師と仰ぐポール・ド・マンが昔の反ユダヤ主義的言説で断罪されたことについては口をつぐんだままなのだが)。90年代以後の論壇の議論は政治とコマーシャルイズムによって深く浸食される形で展開しつつあり、頑固な個からにじみ出てくるような思想—デリダ用語に従って言えば「計算不可能なもの」—が消失して、言説はすべて商品化してしまう。

こうした状況を醒めた目で突き放してみると、「精神」という言葉に重心を置いた小林の思想の方がよほど知的な反響を喚起するものに映るが、これはあくまでも個人的な感想であり、脇道での独白に過ぎない。われわれは、あくまでも実証に基づいた歩みを一つ一つ積み重ねなければならないのである。

『排蘆小船』で述べられていること

以上のような視野のもと、われわれは、しばらく、佐佐木信綱を軸とした「国学」の再編という歴史上のエポックを意識しながら宣長を読むことにする。

さて、『排蘆小船』である。

今日宣長の学問を論じる者で『排蘆小船』を無視する者はいない。この書は、宣長の処女作と位置づけられるものであり、後の歌論『石上私淑言(いそのかみささめごと)』や源氏物語論『紫文要領』へとつながる宣長の思想の原点を示した書と見られるからである。

この『排蘆小船』が何をどう論じたのかについて、新編日本古典文学全集『近世随想集』所収『排蘆小船』の「解題」は、「体系的に整理されたものではなく、話題の繰り返しや引証の曖昧さも目立つ」のであり、「若き宣長が(・・・)気の赴くままに述べ記した渾然たる世界である。」といった評価を提

示している（同書所収『排蘆小船』の「解題」、p.244）が、これはあまりに皮相な論評である。

別稿で述べるように、宣長はこの書を生前秘匿して他見を許さなかったのであるが、相当に大部なものであり、「問ひ」と「答へ」とによって議論を展開していく体裁は一貫して緊迫感をもって維持されており、とうてい「気の赴くままに述べ記した」というような散漫な文体ではない。が、これはあくまで私が受けた文体的な感觸の問題であり、論証の論拠として述べているのではない。

重要なのは、『排蘆小船』の議論が明確な骨格をもっていることだ。そして、それは誰が読んでも「歌道」と「歌学」との2軸をめぐって展開しているということである。この2軸は、ある意味でらせん状に、相互的な関連をもちながら展開しており、かつ、テキスト全体の構造としては「歌道」から「歌学」へとという展開の形をとっている。したがって、同様な議論が反復されているように見えるという指摘は表面的な把握であって、契沖の詠歌と歌学は、前半では「歌道」の文脈で論じられ、後半では「歌学」の歴史の文脈で論じられている。そうした宣長の内的な脈絡を読み取る必要がある。

つまり、『排蘆小船』というテキストは、歌をどう詠むかという実際的な問題—「歌道」の問題—から出発して、「古歌（いにしへのうた）」こそあるべき歌の姿として見らるべきだという思想的な問題—「歌学」の問題—へとという展開軸をめぐって書かれていると、まず言いうる。それは、一つ一つの具体論が「問」「答」で構成されつつ、「問」「答」の単位が2軸をめぐって繋がっていくスタイルである。新編全集『近世随想集』「解題」は、この『排蘆小船』というエクリチュールのもつ潜在的グランド・デザインを逸しているとしか言いようがない。

まして、そこで提示されてくる宣長の「歌学」の説は、後年の「古道」の説に等しい実質をもつものであり、同時に、すでに「物のあはれ」という感性論を組み込んでいるのである以上、「気の赴くままに述べた」というような軽いものでないことはいくら強調してもよい。

しかし、われわれがそれ以上に強調したいのは、別の問題である。それは、前項(3)で引用した箇所

逍遙院をはじめとして、近世の先達道にくらきのみならず、歌学にくらし、故に古書の注解など、ことにあさあさしくして、あやまり多し。(…)すへてかの逍遙院殿の説なども、古書をばひろく考へずして、たたみたりに自分の憶説にてすまし、又はちかき世のはかはかしからぬ説を引て、ふるきたしかなる説を考ふると云事なし。ここに難波の契沖師は、はじめて一大明眼を開きて、此道の陰晦をなげき、古書によつて、近世の妄説をやふり、はしめて本来の面目をみつけえたり、(『本居宣長全集第2巻』、1968年、筑摩書房、pp.77-78)

【注】○近世—われわれの言う「中世」のこと。室町以降、安土桃山までを含んでいる。

○近世の先達道にくらきのみならず—ここにすでに「道」の語のある事は注意してよい。

○逍遙院—飯尾宗祇から古今伝授を受けた三条西実隆のこと。『源氏物語細流抄』他の著書がある。

○西三条殿—実隆だけではなく、三条西実隆、三条西公条、三条西実枝の「三条西三代」を指すか。

○幽齋—三条西実枝から古今伝授を受けた細川幽齋のこと。

にも示されているように、宣長が歴史的な地平で物ごとを構想していた点である。

上の引用文では、逍遙院（三条西実隆）や「近世」の先達は、「古書」をろくに見ず、つまり引証を疎かにし、お手盛りの「臆説」をありがたがって、「ふるきたしかなる説」を捨てて顧みず、「たしかならぬ説」によっていたと痛烈に批判するのだが、これは、従来の権威であった堂上の歌学を否定であるのみならず、「近世」の歌学全体に対する否定になっているのである。

そう読んで初めて、「ここに難波の契沖師は、(・・・) 近世の妄説をやふり」という力の入った表現の言わんとする趣旨を受けとめることが可能となる。

つまり、「歌道」の問題も「歌学」の問題も、宣長においては、中世から江戸期へという歴史的な地平においてはじめて明確な問題として対象化されたのであり、それが他ならぬ契沖を読むことを通じて達成されたのだと宣長は述べているのである。

要するに、『排蘆小船』というテキストは、歌を詠むことと、歌を学ぶこと（それは究極的には古きよき歌の姿を学ぶことである）を相互に連関づけながら、本来の面目における「歌学」の定礎を歴史的な地平において見ようとした試論だということができると思う。

章立ての構成が現代の論文風に整序されていないからと言って、これを体系的に整理されていないと断ずるのは的外れである。『排蘆小船』というテキストは、職人が設計図なしに糸の質や色に即して一回限りのテキスタイルを織り上げていくのと同じように、大まかなデザインを暗黙知としてもちながら、その大枠の内部で自在な知的探求を展開するスタイルのエクリチュールなのである。実は、このスタイル—書き進めながら思考する—は、宣長の思考法そのものであり、後年の『玉勝間』や『初山踏』なども、遊びや雑多な部分を含みながらも全体としては「古学」の概論ないし要説となっている。また、『古事記伝』も巻四までの注釈を書いてから巻頭の序論を書いているのである。宣長の問題として、これは、重要だとも言えるし、同じことは契沖にも当てはまると考えられるから、近代以前の思考法としても問題化し得るかもしれない。

章立てや体裁といったテキストの外形的な構造には、むしろ、時代の知（エピステマー）が直接に反映するものであり、かつ、それは著作と言う形式をとって表出される思考を形づくる根底となるものでもある。気ままに、あるいは、雑多に見えるのは、現代のエピステマーにどっぷりつかったわれわれの感覚であること、常に自らを疑ってかかる必要があるのではないか。

しかし、小学館本は、頭注および現代語訳がきわめて詳細かつ丁寧であって、『排蘆小船』を読むためのテキストとしては最良の書だと思う。読者諸賢は、ぜひこれについて『排蘆小船』を自らの眼で読み、是非を検証していただければありがたい。

2020年3月24日 研究代表者 西澤 一光